

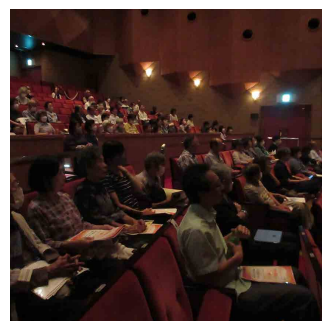
Activity report

2025年版

1年間の活動

2025.3 — 2026.2

MCE



公益財団法人
医療文化経済グローバル研究所
Glocal Institute of Medicine, Culture and Economy

令和8年3月発行

法人のご案内



健康加齢（ヘルシーエイジング）を促進し 幸福（ウェルビーイング）を享受できる共生社会の創造に向けて

（公財）医療文化経済グローバル研究所は、医療、文化・芸術、経済分野の連携により、健康加齢を促進し、市民の幸福度の向上に向けた調査・研究・提言・支援等の取組を行い、市民が幸福に暮らしていける持続可能な地域共生社会の創造に寄与することを目的に市が設立した法人です。

医療文化経済グローバル研究所

概念図



Greeting

ごあいさつ

医療文化経済グローバル研究所の2年目の活動を振り返って

医療文化経済グローバル研究所代表理事・研究所所長

京都大学メディカルイノベーションセンター特任教授 / 京都大学名誉教授 中尾 一和

医療医学、文化芸術、経済社会の3分野が連携し活動する本研究所の活動は2年目を終えようとしています。この間、市民講座の開催などでご協力いただきました関係者の皆さん、また熱心にご参加いただきました養父市民や近隣市町の皆さんに心から感謝しています。市民講座などの機会に声をかけていただき、元気をいただきました。

この2年間の活動は「認知症との共生、先進医療と社会的処方街、養父市」をスローガンとしたものです。認知症の疾患修飾薬であるアミロイドβ抗体治療薬の承認、認知症の14の危険因子(リスクファクター)の解明などの研究成果をうけての活動でした。特に認知症の予防に向けての生活習慣病(高血圧症、糖尿病、肥満症、脂質異常症)の予防・治療の意義、生活習慣の是正(閉じこもり、運動不足、喫煙、過剰飲酒など)の意義などを、少しでも早く分かりやすくお伝えする機会が必要と考えました。その目的を達成するために我が国の第一線で活躍されている専門家の教育講演を中心とした市民講座「養」を企画し、養父市の4地域、すなわち、八鹿町、養父町、大屋町、関宮町を巡回して開催してきました。

医学的処方は診療を通して薬物などを用いるものですが、社会的処方は文化芸術活動などを利用して社会とつながり、社会的孤立を防ぐなどの共生の効果が期待されます。市民講座「養」では毎回2題の教育講演に加えて、養父市関連の複数の文化芸術グループの活動をアトラクションとして紹介してきました。日頃の熱心な練習や活動の成果の発表は、私達を含めて参加者の感動につながったと確信しています。

また、初年度に経済社会部門長をお勤めいただいた光多長温主任研究員の後任には宮垣健生主任研究員が就任されました。今後の活躍を期待しています。

養父市民の皆さん、養父市出身者や養父市関係者の皆様からの医療文化経済グローバル研究へのご意見やご提案、ご理解とご支援を期待しています。

History

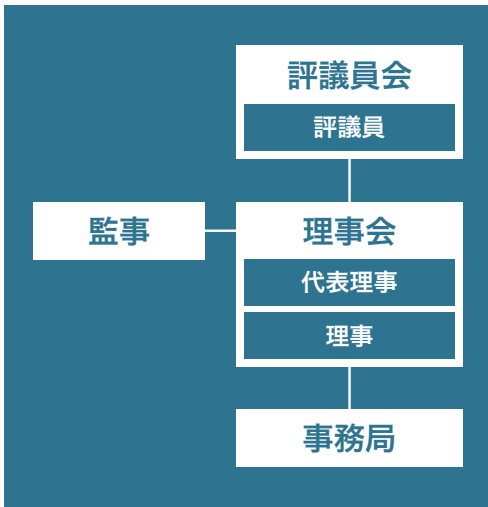
経過と沿革

- 令和4年 4月～9月 コアメンバー等による勉強会を開催
- 令和5年 3月～7月 市が、(仮称)養父医学研究所設立準備検討委員会を設置・協議
- 令和5年12月23日 設立総会
- 令和6年 1月16日 法人成立
- 令和6年11月14日 公益認定(令和6年11月21日 公益認定書到達)

※ 公益認定を受け、活動に賛同し寄附した法人や個人が税金の優遇を受けられるようになりました。

体制

組織図



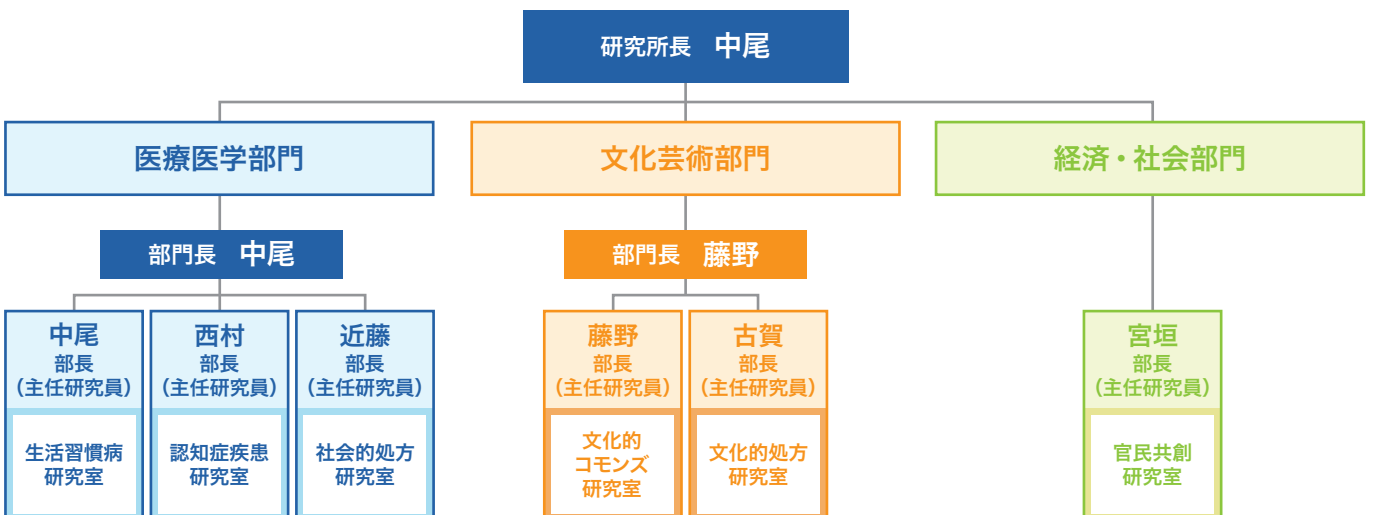
理事 / 評議員

役職	氏名	現職等
代表理事	中尾 一和	京都大学大学院医学研究科 メディカルイノベーションセンター特任教授
理事	近藤 尚己	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻社会疫学分野教授
理事	竹安 栄子	京都女子大学学長
理事	西村 正樹	公立八鹿病院院長 滋賀医科大学名誉教授
理事	藤野 一夫	神戸大学名誉教授、 芸術文化観光専門職大学名誉教授
理事	宮垣 健生	但馬信用金庫専務理事・総合企画部長
理事	米田 規子	養父市教育長
業務執行理事	世登 英明	養父市健康福祉部長
監事	松田 理明	松田公認会計士事務所(公認会計士)
監事	千葉 義幸	ちば脳神経内科クリニック院長、 養父市医療福祉アドバイザー
評議員	永井 良三	自治医科大学学長
評議員	平田 オリザ	芸術文化観光専門職大学学長
評議員	川崎 博也	株式会社神戸製鋼所特任顧問
評議員	清原 桂子	前神戸学院大学現代社会学部教授
評議員	枚田 一広	養父市医師会理事 (前養父市医師会長)
評議員	宮本 厚子	養父市社会福祉協議会会長
評議員	大林 賢一	養父市長

Research organization

研究組織

医療文化経済グローバル研究所 研究部門組織図



主任研究員・研究室の紹介・活動概要

医療医学部門



中尾 一和 部門長 / 部長 (主任研究員)

生活習慣病研究室

研究テーマ

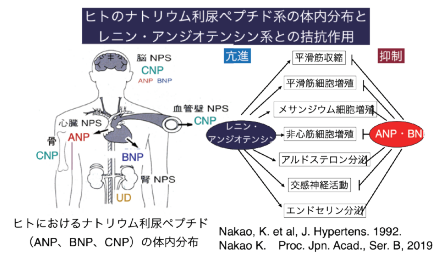
生活習慣病の予防、診断、治療などに関する
内分泌代謝研究

活動概要

生活習慣病の予防、診断、治療に関連するホルモンの研究
などを行いながら、市民の健康加齢に資する教育活動など
を行う。

私が研究しているホルモンは、心臓や血管から分泌されるナトリウム利尿ペプチドです。3種類の生理活性ペプチドからなり、ANP、BNP、CNPと命名されています。ANPとBNPは心臓から分泌される心臓ホルモンとして知られ、心臓の働きが低下する心不全ではANPとBNPの分泌が亢進し、血中濃度が増加することが知られ、心不全の診断に利用されています。また、ANP投与は心不全の治療薬として臨床応用されています。CNPは中枢神経系や血管内皮細胞などで産生され、血圧調節や肺高血圧などでも重要な役割を有すると考えられています。もう一つの研究課題は脂肪組織を構成する脂肪細胞から分泌されるレプチンで、抗肥満ホルモンとして知られています。

認知症の発病を促進する14の危険因子が解明され、その中には生活習慣病の高血圧、肥満(症)、糖尿病、脂質異常症が含まれており、運動不足、過剰飲酒、喫煙、閉じこもりなどの生活習慣も危険因子とされています。ナトリウム利尿ペプチドやレプチンは生活習慣病(肥満症、糖尿病、高血圧など)の病態にもいるる作用が期待されています。疾患とホルモンの関係の研究から新しい診断法や治療法が開発されることも少なくありません。



西村 正樹 部長 (主任研究員)

認知症疾患研究室

研究テーマ

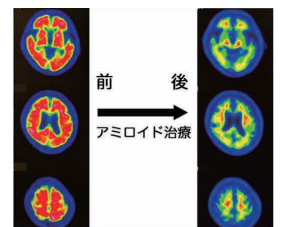
認知症疾患とくにアルツハイマー病の予防
と診断治療に関する研究

活動概要

養父市における認知症の実態調査を行うとともに、早期アルツハイマー病の抗アミロイド治療を実践し、並行して新たな認知症バイオマーカーの開発を進める。

養父市における認知症対策：八鹿病院において医療チームを組織し、アルツハイマー病予防に向け抗アミロイド治療を行なっている他、物忘れ外来ないし認知症外来を受診する症例のうち社会的処方をするケースを養父市担当者につなげる活動も続けています。加えて、認知症支援ネットワーク会議や認知症初期集中支援チーム検討委員会への参画を通じた活動や認知症の実態を把握するための調査を市担当とともに進めています。

血液を用いたアルツハイマー病の早期診断法開発：アルツハイマー病の予防的介入には簡便な早期診断が必須です。それに有用な新たな血液バイオマーカー候補をこれまでに複数見出しているのを受け、その高感度測定系開発を滋賀医科大学などとの共同研究により進めています。今年度は、候補に対する特異抗体の作製を進めた他、既存の血液バイオマーカーの一般住民における解析を行い論文に発表しました (Nakano M, Nishimura M*, 他. Plasma biomarkers for Alzheimer's disease in middle-aged and older Japanese men: A population-based cross-sectional study. Journal of Alzheimer's Disease 2026 印刷中)。



アミロイドPETによる治療効果の判定：赤色がアミロイド(同意を得て掲載)



近藤 尚己 部長 (主任研究員)

社会的処方研究室

研究テーマ

ソーシャルキャピタルや文化資本が健康に
及ぼす影響、社会的処方の推進手法の開発
と効果実証に関する研究

活動概要

養父市の社会的処方の取組について、迅速健康影響評価の手法を活用し、地域住民の健康や社会的つながり、地域包括ケアシステムに与える影響を多面的に明らかにする。

令和7年度は、市が進める社会的処方の取組について、市民の健康や地域に与える影響を検討し、更なるステップアップにつなげる改善案を熟議する場の設計を、研究者の立場から支援しました。具体的には、健康影響予測評価 (Health Impact Assessment : HIA) の枠組みを用いて、医療・介護・福祉・教育分野の関係者が参画する全3回のワークショップを通じて検討を進めました。ワークショップでの議論に加え、支援記録、インタビュー、統計データ等を基に検討を重ね、市の取組が個人の健康・ウェルビーイングのみならず、地域の支え合い意識の醸成、住民同士の交流の増加、医療サービスの適正利用など、多面的な影響を与えることをみんなで共有しました。その一方で、中長期の伴走支援を要するケースも多く、支援者の負担軽減が持続可能な体制づくりの鍵であることも確認し、改善の方向性も明確化されました。これら一連の過程と結果について報告会を開催して市内関係者等と共有しました。

次年度以降は、①文化的処方(アート等を活用した孤立予防・生きがいづくり)の効果評価、②ポジティブヘルス「クモの巣チャート」の普及・実装支援と定量指標開発など、養父市における社会的処方の発展に寄与していきます。



文化芸術部門



藤野 一夫 部門長 / 部長 (主任研究員)

文化的コモンズ研究室

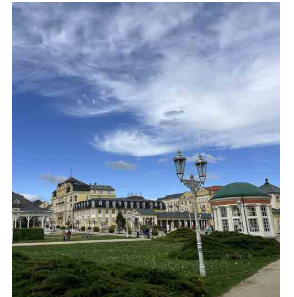
研究テーマ

社会的処方を取り入れた文化的コモンズの形成に関する調査研究

活動概要

クアオルトの方法を活用し、文化・芸術と健康・医療と観光のリンケージによってウェルビーイングと地域再生に寄与している事例を調査し、応用の可能性と課題を究明する。

ドイツ、チェコなど中欧で発展したクアオルト(温泉保養地)の実態を調査し、日本での応用可能性について考察しました。クアオルトに認定されるには法律で規定された様々な条件をクリアする必要があります。そのエリアにはクアパーク、クアハウス、自然治癒薬を活用する病院や治療施設があり、医療保険が適用されます。クアハウスはコンサートや演劇を通して滞在客と地域住民が交流できる施設。今回はドイツ国境に接するフランツェンスバートに滞在し、当地固有の泥炭を使った自然療法を中心に実地調査しました。これとの比較で注目したのは別府市が推進する「新湯治・ウェルネスツーリズム」計画。同市は古くからの湯治場としての歴史を有し、昭和6年に九州帝国大学附属温泉治療学研究所が設立され、九州大学病院別府病院となった現在も温泉治療を積極的に行っています。とくに「鉱泥浴」による線維筋痛症治療は、フランツェンスバートの泥炭療法に通じています。温泉治療学研究所の服部一郎は、すでに1945年「泥土療法史」を発表し、フランツェンスバートの泥炭療法を紹介していたのです。このようにクアオルトは、自然治療を活用して疾病予防効果や健康増進効果を上げており、ウェルビーイングの向上に貢献する場所となっています。



古賀 弥生 部長 (主任研究員)

文化的処方研究室

研究テーマ

疾病、障がい、社会的困難と共にある人への文化芸術からのアプローチに関する研究

活動概要

養父市において芸術文化を活用した社会的処方(文化的処方)の実践を行い、その成果測定と実践継続のための環境整備のあり方を検討する。

「人とのつながり」で孤立やそこから生じる問題を解決する社会的処方の一環として、文化活動でつながりを生み出す「文化的処方」を研究しています。

病気や障害があっても住み慣れた地域でできるだけ長く生活するためには、同じような状況にある人がつながる場づくりが重要です。そこで、65歳以上では100人に1人程度の患者がいるとされるパーキンソン病患者とその家族を対象としたダンスと交流の場「養父市でパーキンソン病と暮らす方の交流会」を始めました。30分から1時間程度、椅子や車椅子に座ったままで踊ってリハビリにもなるダンスで身体をほぐした後、お茶を飲みながら同じ病気の方同士、支える家族同士がおしゃべりします。実施に当たっては、「ダンスはみんなのもの」をテーマとして城崎温泉を拠点に活動する一般社団法人ダンストック、兵庫県泉来健康福祉事務所、この活動を全国で初めて実施した福岡のアーティストやダンス団体などの協力を仰いでいます。令和7年度は10～12月に3回実施し、延べ23名が参加しました。

令和8年度は「交流会」を継続しダンス活動の影響を測定することと合わせて、医療・福祉と文化活動の連携を支える運営手法を調査します。



経済・社会部門



宮垣 健生 部長 (主任研究員)

官民共創研究室

研究テーマ

市民の健康加齢の増進と幸福度の向上に資する、インパクト志向の官民共創事業に関する研究

活動概要

養父市における多様な形の官民共創事例の創出に向け、内閣府の地方創生SDGs調査・研究会報告書を活用した啓蒙活動・事例づくりを行う。特に、DXやGX、越境人材の活用・育成を意識する。

今年度は10月下旬に研究員職を拝命したため、実際の活動は11月からとなり、活動量が限定的なものとなりました。私は現在、内閣府の「企業等による地方創生SDGs調査・研究委員会」の委員も務めており、当該委員会では多様なステークホルダー(産官学金労言士民)の参画による地方創生のあり方について成功事例の収集や分析等を行っています。そうした中、昨年11月の市民講座「養」では講師の一人として、内閣府の研究会の知見や考え方を踏まえ、養父市における官民共創型の事業の在り方、そのための医療文化経済グローバル研究所の活動の在り方について提案を行いました。具体的には、当研究所は、現在は、官と学と土(医師)が中心の官民連携組織ですが、今後、産・金・言・労も参加することで、より深さと広がりのある地域活性化に取り組みめるのではないかと提案しました。この提案を元に、今後は具体的な官民共創事例の創出に向け、活動してまいります。特に人口減少や地球環境の変動などが大きく進む中、DXやGX、越境人材の育成・活用などを重点的に研究してまいります。



第7回 市民講座「養(よう)」

設立1周年 記念講演会

医療・健康 × 文化・芸術 × 経済・社会

令和7年3月15日(土)、設立1周年記念講演会として、第7回市民講座「養」を開催しました。医療・健康分野における国内を代表する研究者お二人をお招きして、健康長寿や幸福を高める生き方やまちづくりに関する講演を行いました。

ご挨拶とメッセージ

令和養生訓+(プラス)

中尾 一和

認知症(生活習慣病) 養生訓 ~ 人生100年時代の健康加齢 ~

講演概要 1 プロダクティブエイジングが導く、「三方良し」のまちづくり

藤原 佳典 (東京都健康長寿医療センター研究所 副所長)

2012年から10年間にわたり養父市と当研究所は「養父市健康調査」を実施してきました。そのデータからから見えてきた健康長寿の秘訣は運動、栄養、そして社会参加です。例えば、運動や農作業を行っている人は、要介護認定を受けるリスクが低い。多様な食品を食べる人ほど、認知症のリスクが低い。社会活動を行っている人は、フレイルになりにくく、フレイルになっても改善しやすい。更に、運動、栄養、社会参加の3つの側面の健康行動を数多く実践している人ほど要介護リスクが低いことです。

当時、養父市では2012年3月に健康で安心して住み続けられる「まち」を目指し、住民・各種団体と行政・当研究所を含む専門機関が連携してコミュニティ会議を設立し、今後の健康づくりのあり方を議論しました。既に養父市では、2013年までに介護予防サポーターを300名養成することを目標として、サロンを市内111ヶ所で開設しました。しかし、茶話会などの交流が主目的であり、フレイル予防の通いの場「毎日元気にクラス」を立ち上げることにしました。ただし、広範囲の地区に多くの通いの場を立ち上げるには、担い手不足の問題を克服しなければなりません。その対策として、シルバー人材センターの会員が仕事として各地区に出張してクラスを立ち上げ、自主運営につなげる仕組み「毎日元気にクラス」を考案・推進しました。その結果、5年間で同クラス参加者では、フレイルの増加割合が



抑制され、更に要介護状態や認知症のリスクが低下し、2024年時点で91ヶ所(67.5%)まで拡大しました。

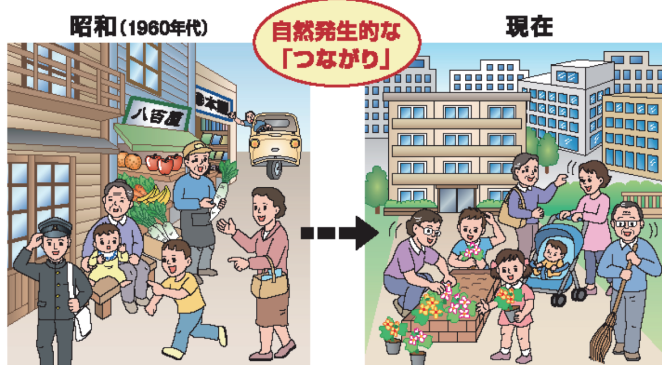
一方、同クラスの参加者の特徴として健康的・社会的なライフスタイルが挙げられました。つまり健康行動や社会活動に消極的な人へのアプローチが必要であることがわかりました。更に、低所得かつ孤立している人をハイリスク層と考えましたが、大半の高齢者には、かかりつけ医がいるため、医療機関からのアプローチが有効と進められました。

なおハイリスク層の人は、趣味・文化活動や農作業を志向することもわかり、運動・体操に限らず社会的処方を活かした多様な社会活動の機会を勧奨することが有効と考えました。

その中で、就労やボランティアといった社会参加・社会貢献を楽しむ生き方をプロダクティブエイジングと呼びます。日本では、生きがい・役割を伴う有償・無償のこうした社会活動を広義の「はたらく」と称することがあります。

多くの研究からプロダクティブエイジングが本人、周囲の人、地域社会にもたらす「三方良し」の効果が示されています。ものづくり、教える、手伝い・軽作業など様々な「はたらく」を通して、様々な世代との新たな交流の機会が増えることも期待されます。当研究所では実証データに基づく好事例を通して、今後も養父市らしいプロダクティブエイジングを提案したいと思います。

地域で「つながり」が生まれるには?



十分に計画された「つながり」戦略が必要

講演概要 2 ウェルビーイング（幸福・健康）を高める方法 ～個人と社会にできること～

近藤 克則（千葉大学名誉教授・グランドフェロー / 千葉大学予防医学センター健康まちづくり共同研究部門特任教授 / 一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構研究部長）

幸福や健康を意味する「ウェルビーイング」を、高める方法を研究してきました。その中で、わかってきたことを紹介します。

全国の延 200 市町村との共同研究である日本老年学的評価研究 (JAGES) に 25 年前から取り組んで来ました。その中で、「あなたは現在どの程度幸せですか?」と尋ね 10 点満点で 8 点以上と回答した人の割合を市町村間で比べてみました。すると少ないまちで 34% から多いまちでは 53% と 1.5 倍の差が見られました。幸福な人が多いまちの理由を探ろうと分析してみると、ポジティブ感情、社会参加、笑う、歩く、ボランティアに参加する人などが多いまち、心が沈む「うつ」や認知機能低下者が少ないまちで幸福度が高い人が多いことがわかりました。



そこで、個人として、まちとしてできる、これらを増やす方法を試して効果を研究してみました。一つ目は、身近に参加しやすい「通いの場」を増やす取り組みです。それによって社会参加・交流・笑が増えることが確認できました。つまり養父市が取り組んでいる社会的処方、幸福な人を増やす取り組みなのです。二つ目は、すでに養父市も取り組んでいる歩数ポイント事業です。他市の同様な事業参加者では、非参加者に比べ、歩く時間が増え、うつが減り、健康寿命の喪失を予防できることが確認で

きました。ボランティアポイント事業を導入した別の市では、ボランティアなどで社会参加する人、笑う人が増えていました。

さらに民間事業者の力も借りて、ゴミの分別ステーションを活用したコミュニティづくりや健康支援型「道の駅」の拡張移転の前後で調べると、近隣住民の行動や健康水準が改善していることがわかりました。内閣府が進める新しい産官連携の手法である成果連動型民間委託契約方式 (Pay For Success : PFS) による介護予防の効果を推定すると、6 年間で 3 億円を超える規模の介護給付費抑制効果も見込まれました。

このようにウェルビーイングと関連する要因や高める方法がわかってきています。その中には、養父市が取り組んでいる社会的処方や歩数ポイント事業などが含まれています。今後は民間事業者も巻き込んで、介護給付費を減らして、その一部をボランティアや民間事業者に還元する PFS の仕組みなどを養父市でも活用してはどうでしょうか。養父市を、さらに幸福度の高いまちにするために、養父市や医療文化経済グローバル研究所との共同研究の機会をいただければ、ぜひ取り組みたいと思います。

まとめ

- well-being（幸福・健康）が高い/低いまちがある
 - 幸福・健康と関連する要因は
 - ポジティブ感情、社会参加、笑う、歩く、ボランティア など
 - これらを（個人&まちで）増やす方法がある
 - 社会参加・交流・笑を増やす社会的処方
 - アプリ・活動量計・ポイント制度
 - 産官学民連携も有用
 - PFS/SIB の活用も
- Pay For Success : 成果連動型民間委託契約方式
ソーシャル・インパクト・ボンド

アトラクション



オープニング

合唱 コールはるかぜ

コールはるかぜの皆さんによる合唱をお聴きいただきました。有名な合唱曲のほか、親しみ深い J-POP を合唱用にアレンジした曲も披露され、会場は素敵な歌声に包まれました。

紹介 1972 年結成。但馬各地から集まった 30 名のメンバーが所属し、年 1 回の自主演奏会のほか、市内の文化祭や合唱祭で演奏するなど、熱心に活動している。



親子ピアノ連弾 田村太郎さん・田村奏太さん親子

親子ピアノデュオ、田村太郎さん・田村奏太さんによる変幻自在な演奏をお聴きいただきました。ピアノ連弾はタイミングの調整など難易度が高いことで知られていますが、親子ならではの阿吽の呼吸で素晴らしい演奏を披露してくださいました。

紹介 養父市在住の親子ピアノデュオ。力強さと繊細さを持つ音楽を求めて今年で結成 7 年目。PIARA ピアノコンクール全国大会「親子デュオの部」第一位受賞。

第8回 市民講座「養(よう)」

医療・健康 × 文化・芸術 × 経済・社会

令和7年6月21日(土)、第8回市民講座「養」をおおやホールで開催しました。共生社会につながる社会モデルの考え方と文化芸術の創造力のつながり、造幣局の歴史と産業遺産をテーマにした講演を行いました。

ご挨拶とメッセージ

令和養生訓+(プラス)

嗜好品の長所と短所

中尾 一和

講演概要 1 既成概念を揺さぶる創造力

～「問題」が問題ではなくなる地平～

山内 泰 (NPO法人ドネルモ代表理事)

本講演では、「社会モデル」に基づく課題の捉え直しと、文化芸術的手法を通じた新たな視座の創出を主題とした。「(障害の)社会モデル」の考え方を敷衍・展開し、社会通念上「問題」とされる事柄が問題ではなくなる地平を展望するものである。

「(障害の)社会モデル」とは、障害を「個人の欠陥」とする従来の医学モデルに代わり、「社会や環境が障害を作り出している」と捉える立場である。この考え方は2006年に国連で採択された障害者権利条約において示され、日本でも2011年の障害者基本法改正により公式に採用されている。

この考え方の意義を、講演者は、問題を個人の責任に還元せず、社会構造や規範そのものに問題の根源を見出す点に見出している。その点で、社会モデルは制度や設備といったハード面にとどまらず、「普通」や「正常」とされる社会規範そのものを問い直すソフト面にこそ本質がある。これはミランダ・フリッカー

れている構造の問題に関わっている。

その上で、こうした既存の構造を揺さぶる手法として、文化芸術(アート)の力を紹介した。西洋絵画の印象派やベートーヴェン後期作品に象徴されるように、当時の常識や美的規範を逸脱しながらも新たな価値を切り開いた表現は、社会規範の変容を可能にする創造的営為と捉えられる。障害者による当事者運動もまた、健常者像への適応を拒み、自らの存在を「世に問う」主体としての在り方を提示する点で、この創造的アプローチと通底している。

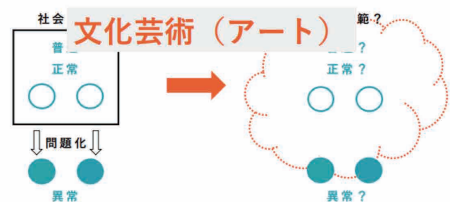
さらに、社会モデル的アプローチの具体例として、大牟田市での「安心して徘徊できるまち」の実践を紹介した。当初は「問題行動」とされていた行為が、地域住民との対話によって「記憶に根ざした馴染みの道を歩く行為」へと再解釈され、「問題」が問題でなくなる地平へと転換されていく具体例である。加えて、村瀬氏による「老いを問題化しない介護」、認知症当事者と介護者が共に創るアートワークショップなど、多様な実践例を紹介した。いずれも、個人を変えるのではなく、社会の側が変わることによって「問題化」そのものを解体しようとする試みである。

社会モデルに基づく「問題」が問題でなくなる地平が、社会的(文化的)処方の実践においても、豊かな示唆を生むことを期待したい。



社会モデル的なアプローチ

- ・既存の社会の規範やしぐみが、問題を生み出している。
- ・社会規範やしぐみを支える考え方を揺さぶることで、「問題」が問題でなくなる地平が見えてくる。



の「認識的不正義」や、日本におけるジェンダーギャップの実態と結びつく話であり、社会の「普通」がマジョリティの都合に最適化さ

アトラクション



オープニング

金管バンド YBジュニアプラス ～infini～ アンフィニ

YBジュニアプラス～Infini～の皆さんによる演奏をお聞かせいただきました。ジャズの名曲から和風なゆったりした曲、人気アニメのメインテーマなど、幅広いジャンルの曲を演奏していただきました。普段から一生懸命練習されている成果を存分に披露してくださいました。

紹介

養父市内の小中学生で構成されるジュニアプラスバンド。但馬アンサンブルコンテスト金賞、ソロコンテスト関西大会銀賞受賞。

講演概要 2 造幣局154年のあゆみと明治日本の産業革命

百嶋 計 (京都大学公共政策大学院特別教授 / 元独立行政法人造幣局理事長)

1. 造幣局の現状

造幣局は、貨幣・勲章の製造のほか、収集用貨幣セットの販売、金属工芸品の製造・販売、貴金属製品の品位証明という業務を行っている国の独立行政法人で、大阪に本局があります。

「通貨法」では、通貨(お金)とは貨幣(硬貨)と日本銀行券(紙幣)とされ、貨幣は政府が発行主体で造幣局が製造、日本銀行券は日本銀行が発行主体で国立印刷局が製造するとされています。

2. 創業者たちの群像—造幣局はなぜ大阪にあるのか

造幣局の創業は1871年で2021年に150周年を迎えました。幕末に日本の貨幣制度が大混乱したため幕府は諸外国から近代貨幣制度を構築するよう求められ、明治新政府が引き継いで造幣工場を建設することとなりました。大阪に造幣局が置かれたのは、王政復古に大坂商人の協力があつたこと、一時大坂遷都論があつたこと、東京が戊辰戦争下であつたこと、大坂が天下の台所だつたことなどが理由でしょう。

そして明治維新の功労者の多くが造幣局の創業に関わっています。五代友厚は、長崎のグラバーに依頼して機械を調達しました。幕末にイギリスに密航留学した「長州ファイブ」のうち、伊藤博文、井上馨、井上勝、遠藤謹助(桜の通り抜けを始めた)が造幣局のトップを務めています。明治天皇が行幸され、西郷隆盛も随行しています。大隈重信は貨幣の単位を「円」と決めました。

3. 新紙幣の顔・渋沢栄一と造幣局

昨年から1万円札の肖像となつた渋沢栄一も大阪に長期出張し造幣局の業務を監督しています。なお渋沢はその後初代紙幣

頭となりました。紙幣の顔になるべくしてなつたと言えるでしょう。

4. 造幣局と明治日本の産業革命

造幣局は日本の近代工業発祥の地でもあります。硫酸ソーダ、コークス、ガスを自給自足し、ガス灯は横浜よりも早く灯り、馬車鉄道は新橋・

横浜間の鉄道よりも早く開通しました。複式簿記も最初に導入されました。世界文化遺産の富岡製糸場、八幡製鐵所と並んで造幣局は明治の「三大官営工場」とも言われています。

こうした日本の産業革命では、お雇い外国人も活躍しました。中でも冶金・化学の専門家ガウランドは、登山家、考古学者としても知られています。造幣局の敷地の一部は後に三菱に払い下げられ、ガウランドの指導を受けた技術者とともに大阪精錬所に引き継がれていきました。

5. 「鉱石の道」と造幣局

古い資料によると、中瀬鉱山の金や生野鉱山の銀が造幣局に納入されていたようです。また関宮で鉱脈の試掘を行ったとの記録もあります。「鉱石の道」は造幣局とも繋がっていたと伺えます。

明治から昭和初期、中瀬鉱山、神美鉱山産等の金地金、生野鉱山産の銀地金などが造幣局に輸納された記録がある

ガウランドも1878(明治11)年生野鉱山を訪問

1930(昭和5)年に造幣局が「関宮」で試掘をしたことも



写真：造幣博物館

6. 最近の貨幣流通とこれからの造幣局

創業者たちの志を受け継ぎ、造幣局は現在も「信頼と挑戦」を行動規範としています。純正画一で偽造されない貨幣を供給することを第一の使命とし、2021年には新500円バイカラー・クラッド貨幣の製造を開始しました。キャッシュレス化の進展や硬貨取扱手数料の導入もあつて貨幣の流通量は減っており、年間の貨幣製造量は大きく減っています。しかしながら造幣局の使命は変わりません。最近では、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)記念貨幣や国立公園制度100周年記念貨幣といった新技術を織り込んだ記念貨幣の製造に当たっています。また、外国貨幣や魅力ある金属工芸品の製造など新たな挑戦も続けていくでしょう。併せて博物館や通り抜けの桜を擁して地域貢献に努めて行くことと思います。

アトラクション



合唱 大屋女声コーラス

大屋女声コーラスによる合唱をお聴きいただきました。往年の名曲を中心に、女声コーラスならではの、美しい歌声が会場を包みました。観客も楽しい気持ちになる、そんなステージでした。

紹介

1978年結成。23名のメンバーが所属し、「いつまでも若々しく楽しく」をモットーに活動し、地元大屋の文化祭や養父市合唱祭、養父市芸能祭など数々のイベントに参加している。

第9回 市民講座「養(よう)」

医療・健康 × 文化・芸術 × 経済・社会

令和7年9月27日(土)、第9回市民講座「養」をビバホールで開催しました。文化・芸術、医療の異なる分野の講師をお迎えして、ケアと地域づくり、認知症予防・治療展望に関する講演を行いました。

ご挨拶とメッセージ

令和養生訓+(プラス)

水と塩分摂取の留意点

中尾 一和

講演概要 1 老いの力

ハブ ヒロシ (アーティスト / 京都大学 大学院医学研究科 社会疫学分野 特定助教 / 医学博士 / NPO 法人 丹田呼吸法普及会 理事長)

今日のように寿命が大幅に延びている社会では、老年期をいかに生きるかが重要なテーマとなっています。そのような中、老いに対する認識は、個々の人生のみならず、社会の制度設計にも影響を及ぼしています。しばしば、老いは否定的に考えられていますが、その見方が社会に反映されることで、高齢者の生が矮小化されてしまうことは考えられないでしょうか?生産性や効率といった一元的な価値から見れば、老いは否定的に見えるかもしれません。しかし、老いることは、果たしてネガティブなものでしょうか?



最も古い文学作品とされる『ギルガメシュ叙事詩』や『竹取物語』には、人類の積年の夢である不老不死が描かれています。これは現代におけるアンチエイジングの人気にも通じており、それは人間として自然な願望です。その一方で、仏教では、老いは避けることのできない苦として説かれています。仏教学者の中村元氏は「苦とは思い通りにならぬこと」と述べていますが、ブツダは、老いを受け入れ、執着を手放し、諦める(明らかにすること)ことで、苦を乗り越えていく道を示しました。アーティストの赤瀬川原平氏の「老人力」という発想も、この姿勢と通じます。彼は、物忘れや衰えを「老人力」と呼び、こだわりから自由になる力として肯定しました。

芸能の世界においては、しばしば老いは大きな価値を帯びます。日本舞踊の世界では、若くして師範になっても「まだ若い」と言われ、味が出るには更に数十年必要と諭されることがあります。老いは高次に至る過程であり、真の名人となるためには、老いる力が不可欠なのです。能楽の世阿弥もまた、「若さに頼っ

た花は真の花ではなく、老いてもなお咲く花こそ真の花である」と述べています。

養父市で取り組まれている、社会的処方などのケアの実践と、老いを結びつけ、さらに深めていくために、贈与という概念を参考にすることができます。贈与は、商品経済のような等価交換とは異なり、あらゆる物や時間や行為を贈り合うことで、信頼や友情など、「かえがたき」関係性を創造していきます。これは、贈る側が見返りを求めず、受け取る側が、与えられたと気づいたときに初めて成立します。この贈与の営みがケアにほかなりません。ケアにまつわる古典である貝原益軒の『養生訓』では、「人の身体は天地と父母から授かった贈り物だから、これを大切にすることが養生である」と説かれています。

Culture (文化)の語源 colere には、「世界を愛情深くケアする」という意味があります。文化的領域において、老いが肯定的に語られてきたのは、「ケアし / される」存在である人間の弱さの中にこそ、真善美が宿ると考えられてきたからです。

本講演では、何か答えを提供するというのではなく、「老いの力」という問いを、参加者の皆さまに持ち帰っていただくことを目指しました。本講演が、少しでも、自身が望むかけがえのない老いを創造していく一助となれば幸いです。



松原 悦朗 (臼杵市医師会 認知症先端医学研究所 所長 / 大分大学 医学部神経内科学講座 特別教授)

大分大学医学部では2011年から大分県臼杵市で、認知症を考える会の設立を契機として、医師会や行政と認知症支援連携体制を構築してきました。



<https://www.city.usuki.oita.jp/docs/2014013000320/>より引用改変

この中で、臼杵市の居住地(山側・海側・都市部・周辺村落部)で認知症機能低下の陽性率が異なることが判明し、認知機能と密接な関係にある生活習慣因子探索のためウェアラブル生体センサを考案し、この活用による認知症リスク因子発掘のための臼杵コホート研究を2015年に開始しました。対象は65歳以上の認知症のない臼杵市住民高齢者855例(平均年齢73.8歳)で、軽度認知機能障害と診断された118例(平均年齢75.7歳)に対しては年1回の頭部MRI検査、アミロイドPETとFDG-PETを追加し、3年間継続しての経過観察を行いました。横断的解析では、①3276歩以上の歩行、②353～434分の至適睡眠時間③80～321分の会話時間が認知機能保持に重要であること、②より短い睡眠時間では脳内アミロイドβ(Aβ)が蓄積し、逆に長い睡眠時間は脳機能が低下することがわかりました。縦断的

解析では、質の悪い睡眠と身体活動の減少が認知機能低下と関連し、アルツハイマー病の脳内Aβ蓄積量増加は睡眠時間よりも睡眠効率低下と関連している傍証が得られました。予防指導の肝となる良質な睡眠効率獲得は良好な身体活動・運動で達成される、即ちアルツハイマー病は運動を基本とした睡眠の質改善で発症予防が可能だとわかりました。こうした研究成果を広く世界の一流英文研究雑誌に投稿することで、臼杵市の世界デビューに貢献してきました。幸いに、世界から一目置かれる存在となった臼杵コホート研究は、ノーベル医学賞を受賞した田中耕一博士率いる島津製作所との共同研究(血液でのアルツハイマー病発症予測)や、抗アミロイドβ(Aβ)抗体薬を開発したエーザイ株式会社との共同研究(生体センサで脳内アミロイドPET陽性者を予測、さらには生活背景と採血の健診データのみから予測する方法)からの成果を続々と生み続けています。

本講演では、私自身が座右の銘としている「MAKE IT WORK」、意味するところは「形にすること」、即ち「医学研究で得られた成果を目に見える形にして社会還元・社会実装すること」を、現在永住の地となった大分県で、そして臼杵市を舞台として、この実現に向けて取り組んできた現状を振り返りつつ概説いたしました。



アトラクション

オープニング

合唱 合唱団セイティブ

合唱団セイティブによる合唱をお聴きいただきました。誰もが一度は耳にしたことのある名曲を、混声合唱ならではの力強い歌声で披露してくださいました。会場も素敵な歌声に癒されるひと時となりました。

紹介

結成35周年を迎えた合唱団。25名の団員が所属し、自主コンサートの開催をはじめ、数々のイベントに出演している。

フラダンス カパーフラオカイリマレイアーピキ

カパーフラオカイリマレイアーピキさんによるフラダンスをご覧いただきました。演目によって全く違った雰囲気があり、本場仕込みのフラダンスに、会場はアロハの世界観に包まれました。

紹介

ハワイの名門、カレオ・トリニダッド氏の日本校。フラの技術のだけでなく、謙虚さや思いやりといったアロハの心を大切に、地域のイベントやコンサート、競技会などに出演している。



第10回 市民講座「養(よう)」

医療・健康 × 文化・芸術 × 経済・社会

令和7年11月29日(土)、第10回市民講座「養」を関宮公民館ノビアホールで開催しました。経済・社会、文化・芸術の異なる分野の講師をお迎えして、これからの養父市創生、アートとケアに関する講演を行いました。

ご挨拶とメッセージ

令和養生訓+(プラス)

季節の変わり目と自律神経・ホルモンのバランス

中尾 一和

講演概要 1 ともにつくる、地域の未来 ～養父市のこれからの考える～

宮垣 健生 (研究所理事 / 但馬信用金庫専務理事・総合企画部長)

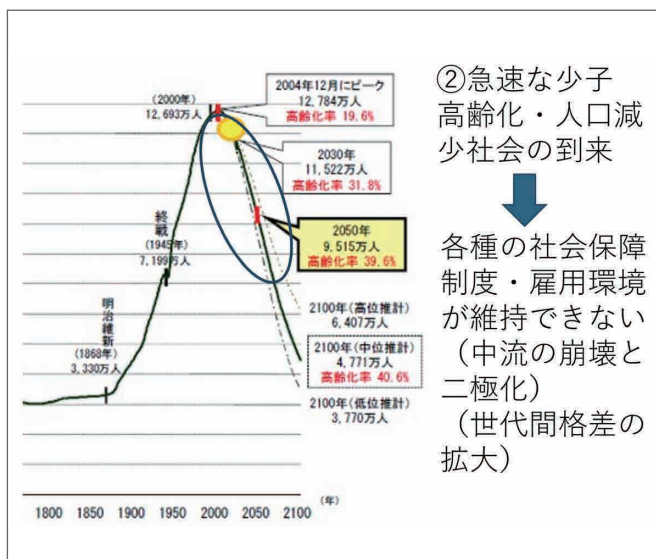
国土交通省の資料にあるように、我が国の人口は明治維新以降、2000年ごろまで急激に増加していきました。この急速かつ持続的な人口増加を支えたのは、戦後については太平洋ベルト地域を中心とした傾斜生産方式などの産業・国土政策と国民皆保険制度や年金制度などの医療・福祉政策です。これらがプラスの相互作用をもたらしたことで日本は世界有数の経済大国・福祉大国になりました。一方、2000年以降はその反動もあり、世界に類を見ない急速な人口減少社会となっています。それに伴って医療・福祉制度も大きく揺らいでいます。

特に今年(2025年)からは人口ボリュームの多い「団塊の世代」が全員後期高齢者となり、ますます医療福祉に与える影響も大きくなってきます。健康寿命はウェルビーイング(=多面的で持続的な幸せ)を考える際に非常に重要な要素であるため、今後も官民が連携し、健康寿命を高めていく取り組みが重要です。また、高齢者と同様に、子どもたちを含めたすべての住民の健康加齢・ウェルビーイングを高める取り組みの一層の充実も期待されます。

これからの地域活性化には官(自治体)と民(住民や企業)の連携が必須となります。内閣府では、「産」(産業界)・「官」(自治体)・「学」(大学等の教育機関)・「金」(金融機関)・「言」(新聞社などのメディア)・「労」(労働者)・「士」(士業)が連携して地域活性化を行う重要性を提言しています。

ここで、養父市の医療文化経済グローバル研究所は、現在は、官と学と士(医師)が中心の官民連携組織ですが、今後、産・金・言・労も参加することで、より深さと広がりのある地域活性化に取り組めるのではないかと考えます。

私自身はこの10月に研究所の理事・主任研究員に就任させていただいたばかりです。これから皆さんと一緒に地域を盛り上げていきますので、引き続きよろしくお願いいたします。



未来を考えてみましょう!

- 自分ごととしてとらえる!
- 自由に楽しく!
- ポジティブに考える
- ピンチをチャンスとして捉える!
- 長期視点で2040年を想像してみる

講演概要 2 アートが人をつなぐ ～社会的処方 × アートの視点～

服部 正 (甲南大学 文学部人間科学科 教授)

2023年から「雑談・屋台カフェ」という活動をしています。月に1回のペースで、お昼に学生と一緒に屋台を出して、雑談5分と引き換えにコーヒーを無料で提供するという取り組みです。近年は効率主義が尊重されていますが、そのようなゆとりのなさは、生活の息苦しさや、クリエイティブなアイデアの枯渇につながっているとも言われています。そこで、このようなカフェを出して、少しでも立ち止まって雑談をする時間を作ろうと考えました。

この活動を始めるきっかけのひとつは、社会的処方について知ったことでした。医師の孫大輔先生や守本陽一先生の健康相談の屋台カフェを参考に、縦割りの組織に横串を通すような、組織のメンテナンス、学生とのコミュニケーションの場づくりを主目的として取り組んでいます。社会的処方では、望まない孤独の解消のために、集える場所、話せる場所が必要だと言われています。そのような場所として、イギリスでは美術館、博物館の役割が注目されています。今回はその一例として、対話型鑑賞と呼ばれる鑑賞方法を実演しました。

パブロ・ピカソの作品を例に、何が描かれていますか、それはどのように描かれていますか、季節はいつ、場所はどこ、などの問いかけをしてみました。対話型鑑賞では、作品を鑑賞しながら意見を出し合うことを通じて、多様な考え方に触れる、会話

の中からアイデアが広がる体験ができます。

その実例として、川内有緒さんの『目の見えない白鳥さんとアートに見に行く』(集英社、2021年)という書籍も紹介しました。ここでは、全盲の



白鳥健二さんと一緒に絵画を鑑賞することで、普段よりも絵が見えるようになる、白鳥さんに絵を説明しているようで、実は白鳥さんの存在によって絵を見せてもらっているということが書かれています。このことは、健康に関する別の問題、ケアとは何かという問いにもつながります。村上靖彦さんの『ケアとは何か』(中公新書、2021年)の一節を引きながら、ケアの双方向性についてお話ししました。聞き取るようとする努力、分かるようとする努力、伝えようとする努力は、ケアそのものであるということです。

最後に、ケアと芸術の関係について、砂連尾理さんが舞鶴市の特別養護老人ホームで認知症高齢者の方々で行っているダンスワークショップ「とつとつダンス」や、焼き物の屋台を町中に設置して絵付けとお茶会のワークショップを展開するきむらとしろうじんじんさん、障害のある人と誠実に向き合い二人の間でしかできない表現を探っていった山村幸則さんと森口敏夫さんの活動などを紹介し、生活の中にアートの要素を取り入れることで双方向的なケアの場を作り出すことが可能であり、それは心身の健康にも役に立つということをお伝えしました。

対話型鑑賞～作品を鑑賞しながら、意見を出し合う

- = 多様な考え方に触れる
- = 会話の中からアイデアが広がる
- = 正解はひとつではないことを学ぶ
- = 正解はひとつではないが、何でも正しいというわけではないことに気づく

アトラクション



オープニング

おおやPANの学校 スティールパン演奏 BigRoofPanz

おおやPANの学校 BigRoofPanzの皆さんによるスティールパン演奏をお聴きいただきました。昭和の名曲からディズニー映画のテーマ曲まで、多様なジャンルの曲を披露してくださいました。日本ではまだ珍しい楽器ですが、その美しい音色に癒されました。

紹介

結成15年を迎えるスティールパン集団。日本屈指のスティールパン奏者である山村誠一氏に師事。市内での演奏会のほか、関西各地のイベントに参加し、カリブ海のサウンドを届けている。

合唱 関宮ハーモニー

関宮ハーモニーの皆さんによる合唱をお聴きいただきました。聞きなじみのある曲から始まり、最後はオリジナル曲の「関宮ハーモニーあいさつの歌」で締めくくっていただきました。熟練された美しいハーモニーを届けてくださいました。

紹介

平成2年結成の女声合唱団。市内のイベントへの参加を中心に活動している。90歳のメンバーを先頭に、毎週練習に励んでいる。「健康に楽しく！」がモットー。



設立 2 周年

第11回 市民講座「養(よう)」

医療・健康 × 文化・芸術 × 経済・社会

令和 8 年 2 月 14 日(土)、第 11 回市民講座「養」をやぶ市民交流広場 (YBファブホール) で開催しました。「認知症に備え 共に歩もう 幸せな未来へ」をテーマに、共生と予防に関して、それぞれの分野の講師をお迎えして、講演を行いました。

ご挨拶とメッセージ

令和養生訓+(プラス)

中尾 一和

認知症のリスクファクター ～ 幼少期の教育不足と難聴について ～

講演概要 1 認知症になってもその人らしく生きる社会を目指して

恩蔵 絢子 (脳科学者/東京大学大学院総合文化研究科特任研究員)

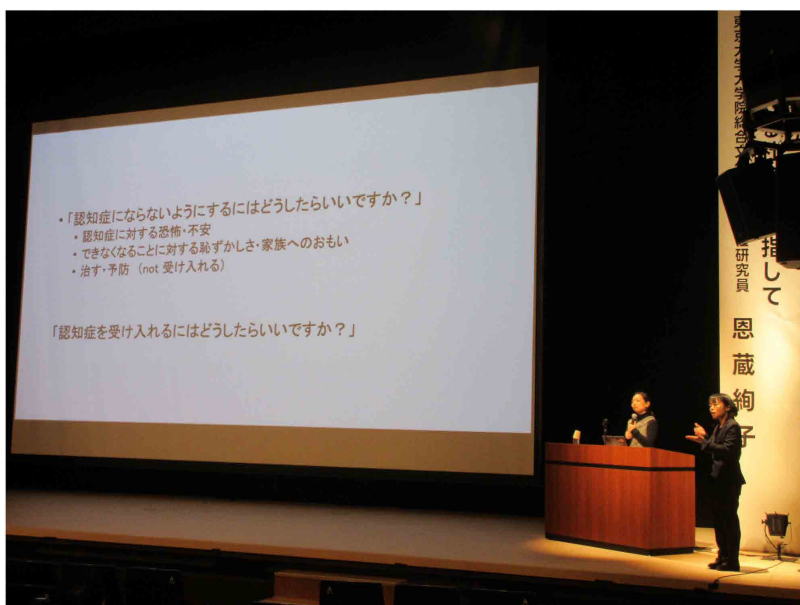
「認知症はどうしたらならないでいられるのか」と悩んでいる人も多かもしれません。これまで認知症に関しては、認知症にならないようにするために予防・治療に焦点が当てられてきました。しかし、私は「認知症はどうしたら受け入れられるのか」という視点もとても大事だと思っています。認知症になっても、また、認知症が進行しても、脳の認知能力がゼロになってしまうなどということはないのです。認知症が重度になったときでもどれほどの能力や感情が残るのかをお話し、その人に残る能力や感情を最大限に引き出すような関わり方を一緒に考えたいとおもいました。

アルツハイマー型認知症では、初期には海馬(かいば)と呼ばれる記憶の中核が、少しだけ萎縮することが知られています。海馬は、新しい出来事の記憶を作る場所ですので、海馬が萎縮すると、今見ているものや今聞いたことを覚えておくこと、すなわち「今、誰と、どこにいるか」という記憶を作ることが苦手になります。しかし、たとえ海馬を手術で全部取ってしまっても、昔の記憶は無事に残っていることが知られています。今のことが覚えにくくなるだけで、既にならしていた記憶は問題がないのです。

また、もちろん脳にはさまざまな部位があります。例えば、大脳基底核(だいのうぎていかく)や小脳(しょうのう)は、アルツハイマー型認知症では進行しても萎縮しにくい部位だと言われています。脳部位が認知症によって全部影響を受け、一直線に能力が衰えていくということではなく、影響を受けにくい部位もあるのです。そして、この大脳基底核や小脳は、運動の記憶を司っています。自転車の乗り方、包丁やカンナの使い方など、体を繰り返して覚える記憶のことです。すなわち、認知症でいままで得意だった料理をしなくなっているとしても、それは、もしかしたら海馬のちょっとした萎縮のせいで、「今何を作ろうとしていたか」が思い出せなくて、例えば、大根を切っている途中でどうしたらいいのか途方に暮れてしまっているだけで、料理の技術は脳から消えていないのかもしれません。台所で横に見てくれている人がいて、「あ、いま大根の味噌汁を作ろうとしているんだよ」と、思い出させてくれれば、「あ、そうか、そうか」と料理をまた再開できることがあるのです。

海馬が少し萎縮することによって、海馬の隣りにある感情の中核・扁桃体(へんとうたい)も、海馬の機能を補おうとがんばることが知られています。認知症によって高まる能力もあり、それが感情なのです。そして亡くなるまで持っている感情に、「人の役に立ちたい」という人間らしい感情があります。

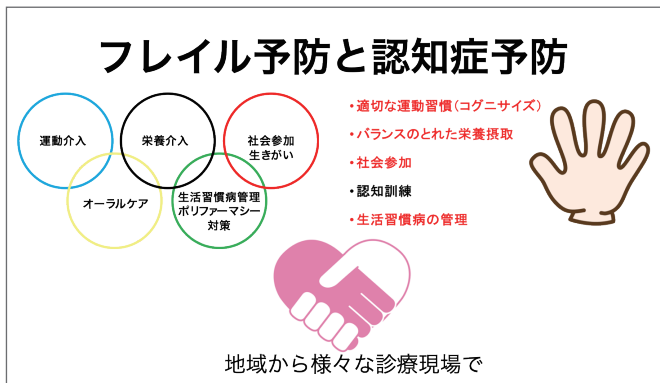
認知症によって、少しずつ衰える機能は確かにありますが、残り続ける能力、そして感情があるということを知ってほしいです。



講演概要 2 脳と体を鍛えていつまでも元気で

荒井 秀典 (国立長寿医療研究センター理事長)

日本では後期高齢者人口が今後も増加し、要介護リスクが高まることから、健康寿命の延伸と介護予防が喫緊の課題である。要介護の原因としてフレイルや認知症の占める割合が増加しており、これらへの早期対応が重要である。フレイルは加齢に伴う予備能力の低下によりストレスに脆弱となった状態であり、身体的・精神心理的・社会的要因が相互に影響する多面性を持つ。しかし、フレイルは可逆的であり、適切なスクリーニング(簡易フレイルインデックスなど)と早期介入により改善が可能である。



認知症について、認知症者数は今後も増加が見込まれる一方、欧米では発症率低下の報告もあり、危険因子への介入によって発症を遅らせることが可能である。Lancet 委員会が示す14の修正可能な危険因子のうち、特に難聴は最大のリスクであり、補聴器使用により軽度認知障害(MCI)から認知症への進行リスクが有意に低減することが明らかとなった。また、糖尿病や高血圧など生活習慣病の管理が重要であり、中年期からの予防管理が認知症予防の鍵となる。

さらに、脳と身体機能の間には密接な関係があり、歩行速度低下が認知症発症リスクと関連することから、「体を鍛えること

が脳を守る」ことが科学的に裏付けられている。フィンランドのFINGER研究に代表される多因子介入(運動、栄養、認知訓練、社会参加、生活習慣病管理)は認知機能低下を抑制し、世界的な展開へと発展している。

日本版多因子介入研究であるJ-MINTでは、65～85歳の軽度認知機能低下者を対象に18か月間の介入を実施し、全体では主要評価項目に有意差はなかったものの、運動プログラムへの高い参加率を維持した群やアルツハイマー型認知症のリスクを高める遺伝子であるアポE4保有者では有意な改善が認められた。これは、継続的な身体活動と個別化アプローチの重要性を示唆する結果である。

認知症予防には「Five FINGERS」—運動、栄養、社会参加、認知訓練、生活習慣病管理—が重要であり、フレイル予防とも共通する包括的アプローチが必要である。筋肉と脳は相互に影響し合う臓器であり、日常生活の中で体を動かし、人とつながり、適切に食べ、学び続けることが、いつまでも元気でいるための鍵である。地域社会全体で支え合いながら、備えから始まる幸せな未来を築くことが重要である。



アトラクション

オープニング

合唱 八鹿高校音楽部

八鹿高校音楽部の皆さんによる合唱をお聞かせいただきました。合唱曲のほか、人気アニメのメインテーマを演奏され、普段耳にする曲とは一味違う素晴らしい雰囲気でした。若々しく、力強い歌声を響かせていただきました。

紹介

一年に一回開催している定期演奏会は、今年で61回目を迎える。伝統ある音楽部は、関西屈指の強豪校であり、今年度開催された第80回関西合唱コンクール高校生部門において金賞を受賞。

ダンス 芸術文化観光専門職大学「心舞 -Shinbu-」

芸術文化観光専門職大学ダンス団体「心舞 -Shinbu-」の皆さんによるダンスパフォーマンスをご覧いただきました。アクロバティックな演目のほか、様々なジャンルのダンスを披露していただきました。照明の演出も相まって、自然と世界観に引き込まれる、素晴らしいパフォーマンスでした。

紹介

芸術文化観光専門職大学の学生で構成されるダンス団体。コンテンポラリーダンスを中心とした多様なダンスを踊り、観る人の心を舞い踊らせることを目指して活動中。地域のイベント出演のほか、定期的に自主公演を開催している。



その他取り組み一覧

■ 法人設立1周年記念式

令和7年3月15日(土) 公立八鹿病院第1講堂において、設立者である養父市長・市幹部、市議会議員、市内関係団体・法人、教育関係者、当法人役員など38人が参集し、1周年記念式を執り行いました。

あいさつした大林市長、谷垣議長からは、設立目的である市民の健康加齢の増進と幸福度の向上につながる取組の発展とその成果への期待が述べられ、中尾代表理事は2年目の活動をさらに充実させていく決意を述べました。

式終了後には、公立八鹿病院食堂の凡ライス様が4月から新メニューとして提供する地元食材を使用した「低糖質、高蛋白質、良質脂質」の健康食「養生ランチ」(中尾代表理事監修)を出席者で試食しながら、歓談しました。



■ 既成概念を揺さぶる支援(ケア)を考える 座談会

令和7年6月21日(土)ギャラリー&カフェ オンサルデ(ショッピングタウンペア内)で、第8回市民講座の講師山内泰氏を囲んで、市内支援団体の関係者、コミュニティナース、市職員、主任研究員(文化芸術部門)が、山内氏の講演を受けて、参加者間で福祉現場の課題や展望について意見交換を行いました。

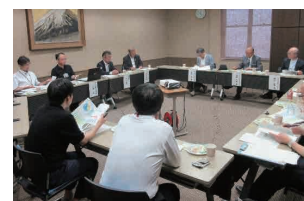
各支援者の活動を報告しあいながら、「社会モデル」「文化芸術の力」「既成概念の打破」「居場所の創出」をテーマに話し合い、制度の枠を超えた柔軟な支援・表現の場づくりをいかに実現していくか考える機会となりました。



■ 地方公共政策に関する意見交換会

令和7年6月21日(土)大屋市民センターで、第8回市民講座終了後、講師の百嶋計氏(財務省OB)を囲んで、大林市長をはじめ市幹部、世登商工会会長、研究所主任研究員(医療医学部門)2名が人口減少社会における地方創生のあり方や地方公共政策について意見交換を行いました。

市から財政状況の説明がされた後、移住定住施策、地域資源を活用した観光振興、社会インフラの老朽対策、医療政策といった幅広い議論が行われました。百嶋先生からは、大杉の重要伝統建築保存群、明延一円電車、樽見の大桜など養父市特有の地域資源を活かして地方創生につなげてほしいと提言をいただきました。



■ いずみ会の養生ランチ調理実習

令和7年9月9日(火)に、YBファブで実施された食生活改善グループ養父市いずみ会中央研修会に中尾代表理事が出席し、養生ランチ(低糖質、高蛋白質、良質脂質)の調理実習と意見交換を行いました。

この取組は、世界の健康食として知られる地中海食を参考に開発された生活習慣病食「養生ランチ」を一般家庭でも作れる料理として提案しようと企画されたもので、同代表理事監修レシピを元に、いずみ会の皆さんが調理し、試食しました。試食後には、同代表理事が認知症のリスク要因となる生活習慣病と肥満の関係、糖質摂取の抑制の必要性と養生ランチ誕生の経緯を講話するなど交流を図りました。



養生ランチのメニュー

ご飯(1人あたり80g)(96kcal 塩分0.0g)、鶏肉のレモン風味オイル焼き(181kcal 塩分0.8g)、ゆで卵(36kcal 塩分0.1g)、山椒オイルぎんびら(60kcal 塩分0.7g)、野菜のくるみみそ和え(45kcal 塩分0.5g)、大根サラダ(27kcal 塩分0.3g) きのこと豆腐のとろみスープ(67kcal 塩分0.9g)、メロン(49kcal 塩分0.0g)



■ 中学校訪問

講座「先輩と考える私たちの未来について」

昨年に引き続き、地元出身の医師であり研究者である中尾代表理事が八鹿青溪・養父・大屋中学校に outgoing 中学校1年生を対象に講話しました。

この講座は、養父市の子どもたちに先輩からのメッセージを届け、子どもたちが自分自身の今と未来について考え、行動を始めるターニングポイントになることを目的としています。今年の講座では、幼少期から現在に至る考え方や夢について語り、より広い視野を持って夢に向かって努力することの重要性を伝える内容となったようです。



公益財団法人 医療文化経済グローバル研究所

〒667-0021 兵庫県養父市八鹿町八鹿 1685-2 やぶパートナーズ株式会社 2F

TEL / 079-660-7478 FAX / 079-660-1375 mail / info@mce.or.jp

※ お電話は繋がらない場合がございます。

ホームページはこちら
https://mce.or.jp

